

中世古筆切資料聚影

——架蔵、和歌関係資料を中心に——

池 尾 和 也

はじめに

近年の古筆資料の充実に、目を見張るものがある。

『古筆手鑑大成』⁽¹⁾の刊行を期として、『古筆学大成』⁽²⁾の刊行に至る手鑑・古筆資料の公開・複製の進捗に依つて、従来、博物館や美術館での展観や売立目録などで偶然属目し得た資料に頼っていたものが、図書館等でそれらを簡単に利用し得るようになった。また、個人の所蔵する古筆切資料も、藤井隆・田中登両氏の『国文学古筆切入門』やその続編・続々編に代表されるように、適切な解説を付して刊行されるようになった。⁽³⁾

こうした資料の提供・蓄積を通じて、国文学研究（殊に、その基礎的研究）がより一層充実・進捗して行くことが期待される。

本稿では、稿者の蒐集した古筆切資料を影印し、若干の解説を付して紹介したい。もとより、稿者の蒐集自体は、藤井隆氏が「古写本がわかるということの一番大事なことは筆致・紙質による年代鑑定であつて、それは現物を見て手で触れることの積重ねの結果、次第に会得するものである。従つて可能な限り原物を自分で持ち、常に座右に置くのが最も近道で、またそうでないと、本当には会得しにくいように思われる。そ

れ故に、室町古写本でも稀少となつて容易に手の出ない今日、古写本のわかる人が今後出にくくなるのではないかと心配される⁽⁴⁾と述べておられるように、古写本に触れることの少ない世代に属する稿者自身のための、身近な「鑑識教材」として需めたものである。それ故、紹介に値するようなものを心掛けて蒐めたものではなく、偶々手にし得たものばかりであり、従つて、本稿も体系的な（一つの作品や伝承筆者を対象を絞つたような）紹介では有り得ない。但し、中には徒に死蔵すべきではないと思われる資料も存するので、本稿では、対象を和歌資料に限定して、その内の何葉かを紹介することとした。幾許かでも、和歌資料の充実に役立てば幸いである（以下、各切について、【極札】

【料紙】【出典】【書写年代】【伝承筆者】【翻刻】【備考】の項を設けて略記する⁽⁵⁾（寸法は全てcm）。

一 伝藤原俊忠筆二条殿切

【極札】表「御子左俊忠卿^{□小弁師俊}、裏「卷物切

^{墨割印}庚申七^{（未印）}神田道伴」（14・3×2・4）。元文五（一七

四〇）年七月、神田道伴極。

【料紙】斐紙、上三本下一本墨界有り（24・6×14・3（1・5+1・6+1・6+18・8））。

【出典】『廿卷本類聚歌合』散佚部分。

【書写年代】平安後期。

【伝承筆者】俊忠（御子左、忠家男）、延久三（一〇七二）年—保安四（一一二三）年七月九日、五三歳。

【翻刻】

左小弁師俊

あまくものかへしの風にさそはれて

ふゆの、を花ゆくゑしられす

左哥有題心すかたもあしくもあら

す右哥風にさそはれてを花の

ゆくゑなく心ゆへし花おほつかなし

一、伝藤原俊忠筆二条殿切

御子左後忠卿

大分県立総合資料館蔵

在子師後

[illegible]

【補考】本切は、『増補新撰古筆名葉集』⁽⁶⁾「俊忠」項の冒頭に「二条殿切 卷物哥合仙花紙墨野アリ哥二行 書忠家卿ニ似タリ」とある名物切。「二条殿切」は、伝忠家筆「柏木切」等と同じく『廿卷本類聚歌合』の断簡であるが、本切に載せる一首は、現存諸資料に見の新出歌。また、本切が属する歌合自体も不明である。作者「師俊」の官位名表記「左小弁」からは、保安三（一一二二）年十二月二十二日任左小弁以後、同四年十二月二十日転右中弁以前と限定される。その間の挙行と推定される歌合としては、保安四年春以前の伊勢斎宮での『斎宮姁子内親王石名取歌合』、保安四年以前春『権中納言俊忠家歌合』、保安四年七月以前の『忠実家紙紙合』、天治元（一一二四）年春以前の『長実家歌合』、天治元年以前春『雲居寺歌合』等が知られるが、師俊の出詠を確認し得るものはない。但し、萩谷朴氏が『平安朝歌合大成』第六卷⁽⁷⁾に三一九「某年 忠通歌合雜載」として掲げる歌の中に、新古今集の権中納言師俊歌（恋一・一〇七六）が見えるこ

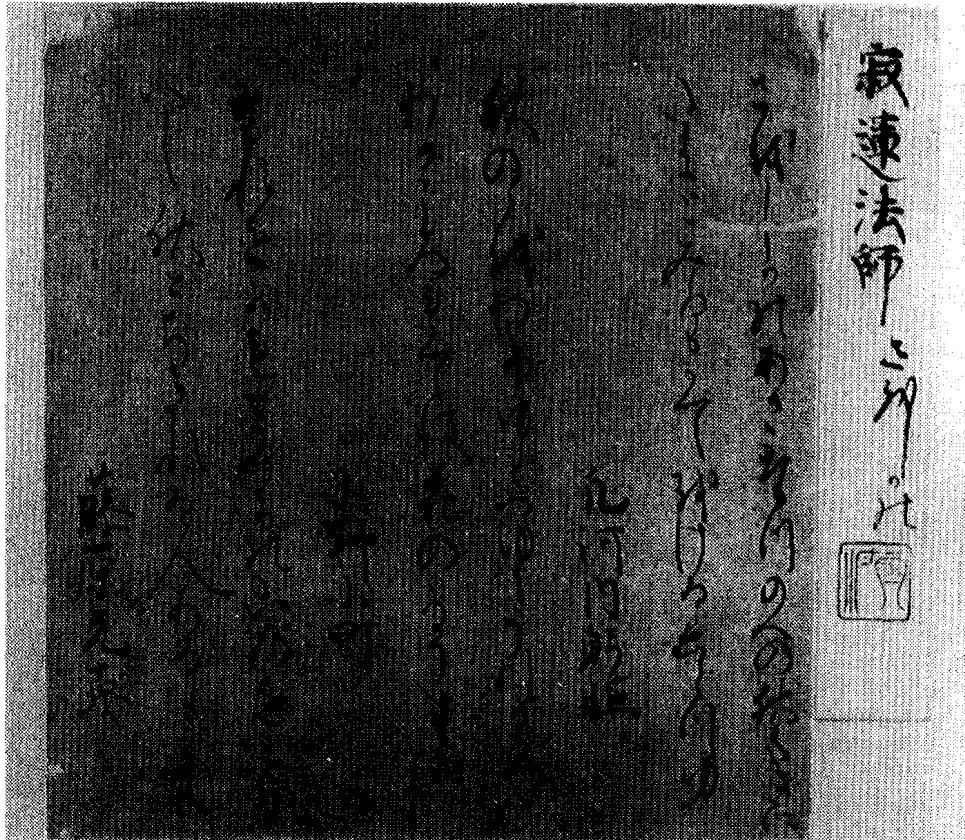
とが注目される。氏はそれらの雜載歌の存在から「忠通が廿卷本に伝える十二ヶ度の歌合以外に自家の歌合を催さなかったとは断定し難い」ことを説かれており、本詠もまた、そのような忠通家の催しの内の一首ではなかろうか。

本切は、その罫線の状態から、『廿卷本歌合』中のE罫料紙に分類されるが、萩谷氏の御調査に依ると、このE罫料紙は、第一次増輯期に「新たに参加した内大臣忠通方の規格用紙」であり、「近代的な内大臣家歌合や士大夫家歌合を主として取り扱」ったものである⁽⁸⁾という。こうした点からも、本切が保安三年末～同四年末までに関白（或いは摂政）左大臣通忠家で催された歌合の断簡ではないかと推定される（そうであれば、この判詞は、基俊のものであろうか）。

二 伝寂蓮法師筆六半切

【極札】表「寂蓮法師^{さをしかの}」⁽⁹⁾、裏書なし（13・

二、伝寂蓮法師筆六半切



8×2・1)。極印は古筆分家印（了仲〈明暦二（一六五六）年—元文元（一七三六）年八月晦日〉か）。切裏右上に「寂蓮法師」と打付け書、右下隅に不明の墨丸印有り。

【料紙】斐紙（15・7×14・4）。

【出典】『新古今和歌集』第四・秋上・三三四歌本文・三三七作者。

【書写年代】鎌倉初期。

【伝承筆者】寂蓮（俗名藤原定長、阿闍梨俊海男、俊成猶子）、生年未詳—建仁二（一二〇二）年七月一三—二〇日、六〇余歳。

【翻刻】

さをしかのあさたつのへの秋はきに
たまとみるまでをけるしらつゆ

凡河内躬恒

秋の、をわけゆくつゆにうつりつ、
わかころもては花のかそする

小野小町

たれをかもまつちの山のをみな

へし秋とちきれる人あるらし

藤原元真

【補考】本切は、『増補新撰古筆名葉集』『寂蓮』項に「同（六半） 新古今哥二行書」とある切に該当するものと思われる。『古筆学大成』第十卷に「⑦伝寂蓮筆新古今和歌集切（一）」として揚げられた八葉（図版9～16）と同筆。原態は升型の冊子本。同解説では、図版9（個人蔵）を代表させて寸法を記している（14・8×14・6）が、徳川黎明会所蔵『藁叢』人四七（図版13）は、15・7×14・3 cmであり、本切とほぼ同じ寸法である。天地を切らない元の状態では、大体縦15・7 cmであつたと考えられる。『古筆学大成』解説には、「一見して、鎌倉時代初期の書写と推定するにやぶさかではない。（中略）この八葉は、現存する『新古今集』の最古の書写本と推すにはばからない、貴重な断簡である」と述べられている。本切の第三首の第三句を途中で次行に送っているところなども、本切が鎌倉

初期を下らない書写であることを窺わせる。但し、全般に字句の補入や脱字（本切第三首第五句は「人そあるらし」で「そ」がおちている）が見受けられる点に注意される。同解説に挙げられた極札からは、この六半切は、一六七〇年代後半から一七二〇～三〇年頃にかけて切断・流布されたものであると推定される。

三 伝藤原俊成筆御室五十首切

【極札】表「五條三位俊成卿（元）」、裏「（宋）割印」

哥一首切 辛 四 神田道伴（14・4×2・2）。享保六

（二七二二）年四月、神田道伴極。

【料紙】楮紙（27・5×3・5）。

【出典】『御室五十首』秋十二首・寂蓮・八三〇。

【書写年代】鎌倉初期。

【伝承筆者】俊成（御子左、俊忠男、法名釈阿）、永久二（一一一四）年—元久元（一二〇四）年二月三〇日、九一歳。

【翻刻】

いろといへはこのはをつくすやまかせに

こゑをかきりとをしなくなり

【補考】本切は、『守覚法親王家五十首』の寂蓮詠を書写した一連の古筆切の内の一葉である。古筆名葉集類には記載されないようであるが、「五社切」「住吉切」「久安切」等の名称が付されたものも存在するので、

そのように誤認されたまま、名物切として流布したものも多いものと考えられる。

以下に、その伝存状況を記しておく（括弧内の漢数字は、御室五十首の歌番号）、現在、①『書苑』第十卷四号「五社切」（八一八—八二四）、②『五島美術館国宝展』（於白鶴美術館、昭和四〇年一〇月一九日—一月二八日）「住吉切」（八二五—八二六）、③『日

三、伝藤原俊成筆御室五十首切



本書流全史⁽¹⁰⁾ 図版九三「詠草」〈八二五—八二九〉、④『千とせの友』九三〈八一五—八二四〉、⑤『落葉集⁽¹¹⁾』四八「住吉切」〈八二五—八二六〉、⑥『古筆⁽¹²⁾』図版一六七「久安切」〈八四〇—八四三〉、⑦『野辺のみどり⁽¹³⁾』二三「住吉切」〈八四四—八四七〉、⑧『ふるかゞみ』二—四「久安切」〈八五一—八五五〉の八葉が知られるようである⁽¹⁴⁾。④⑧は未見。この内、①④、②③⑤は内容が重複するが、②⑤は全く同じものである。寸法は、① $27 \cdot 0 \times 30 \cdot 1$ 、⑤ $25 \cdot 6 \times 7 \cdot 2$ 、⑦ $27 \cdot 5 \times 23 \cdot 5$ （③⑥は不明）。筆跡は、①②⑤⑦が同筆と認められ、③は明らかに異筆、⑥は③に通うところがあるが、完全に同筆かどうかは断定できない。また、③は、最初に「秋調五首」とあって、『御室五十首』の「秋十二首」とは一致せず、春名好重氏は「俊成風の書を書いたある人の筆跡⁽¹⁵⁾」と断じられているが、②⑤との一致部分は、字母までが全く一致するため、むしろ模写であると考えた方がよいものと思われる。本切は、①⑦と寸法・筆跡とも一致し、同一断簡の切と

認められる。いずれにせよ、このような二種（或いは、それ以上）の伝俊成筆御室五十首切が存在することには注意を要する（久曾神昇氏は、「釈阿時代後期（七八歳—九一歳）」の手跡として⑦を掲げるが、特にこのことに関する言及はなされていない⁽¹⁶⁾）。

①②⑤⑦及び本切の筆致は、右肩から左下への線が非常に強く、特徴的で、連綿は二、三字程度で切れており、全体に老年を感じさせる或る種の硬さが見受けられる。また、俊成独特の中心線を外した書写態度が認められる。これに対して、③は、一見いかにも俊成風であるが、線が細く、撥ねも弱い。また、中心線も通っている。『御室五十首』の催された建久九（一一九七）年には、俊成は八五歳であり、真筆であれば、最晩年の筆跡に属する。

尚、料紙は、①の紙背に仮名書きが認められ、書状の反故を用いたものであることがわかる。また、同じく①に認められる紙継ぎの状態から、元は卷子本であったことが知られる。

四 伝中院通方筆六半切

【極札】表「中院家祖通方卿（こよひは）」、裏「六半切」

【宋割印】乙亥六（神田定武）「14・3×2・2」。宝暦五

（二七五五）年六月、神田道僖（定武）極。

【料紙】斐紙、薄様黄染紙（15・8×14・8）。

【出典】未詳。

【書写年代】鎌倉初期。

【伝承筆者】通方（源、通親五男）、文治五（一一八九）年—暦仁元（一二三八）年、五〇歳。

【翻刻】

こよひはせめてあふのまつはら

暮戀

つきまつと人にはいひしいつはりを

それはかりなるゆふくれのそら

變戀

あすかはかはるこゝろをたのみにて

せをふちまてとまつよなりけり

供花^二 不知居所戀

おもひあまりもすのくさくきそなたとも

たのめぬそらのなかめられつ、

【補考】現在、管見では他に類切を見出せない。本切は、元は升型の冊子本。詞書の体裁から、私家集の断簡であろうと推測されるが、本切に所収する四首はいずれも新出歌であり、本切がいかなる家集Ⅱ歌集の断簡であるかは特定できない。但し、第四首詞書「供花^二 不知居所戀」に依り、同歌が「供花会」における詠作であることが知られる。供花会和歌としては、後白河院の法住寺御所におけるそれが有名であるが、同供花会での詠作に確認される歌題中には「不知居所戀」⁽¹⁷⁾題は見出せない（但し、同供花会和歌の歌題は、非常に特殊なものが多く、また、参加者全員が同一歌題で詠作したのかどうかも疑問が残る）。しかし、本詠は、後白河院法住寺御所五月御供花会での俊成詠「たのめこし野べのみちしば夏ふかしいづくなるらんもすの草ぐき」（千載・恋三・七九五）の影響を強く受けた詠

作であることが窺われ（本歌である万葉集一九〇一よりも、俊成詠との距離の方が近い）、同じ「供花会」での詠作である点も注意される。以上からは、本詠もまた、後白河院の法住寺御所御供花会での詠作の内の一首である可能性が高いものと考えられ、この断簡の元となった歌集もまた、後白河院政期に活動した（しかも、仙洞和歌会に出詠し得た）歌人の家集かと推定される。更に、同類の切の出現を待ちたい。

尚、通方を伝承筆者とする切自体も少なく、古今集を書写した四半切（久曾神昇氏著『古今和歌集成立論』図一三五）、後撰集を書写したもの（『古筆手鑑』五一―一三〔『名家古筆手鑑集』思文閣、昭和四十六年四月〕）、新古今集を書写した「吉田切」（『見ぬ世の友』七一、『藻塩草』八〇、白鶴美術館蔵『手鑑』）、同じく新古今集を書写したもの（『世々の友』一四六、宮内庁保管『手鑑』、永青文庫蔵『手鑑』）などが知られるのみである。⁽¹⁸⁾

五 衣笠内大臣家良筆御文庫切

【極札】表「衣笠内府家良公^{あきのいろも}」、裏「^{（角印）}茂入道順」（14・1×2・1）。初代朝倉茂入（道順）^{（角印）}極。切裏、右上と中央に「正筆／自詠切／衣笠内大臣家良公」、左上に「衣笠内府家良公／定家卿高弟四人之内／代々集二入／三十五」と打付け書、左上隅に不明の墨丸印有り。

【料紙】楮の素紙（31・0×8・8）。

【出典】『後鳥羽院定家知家入道撰歌』散佚部分。

【書写年代】鎌倉中期。

【伝承筆者】家良（九条、忠良男）、建久三（一一九

二）年―文永元（一二六四）年九月一〇日、七三歳。

【翻刻】

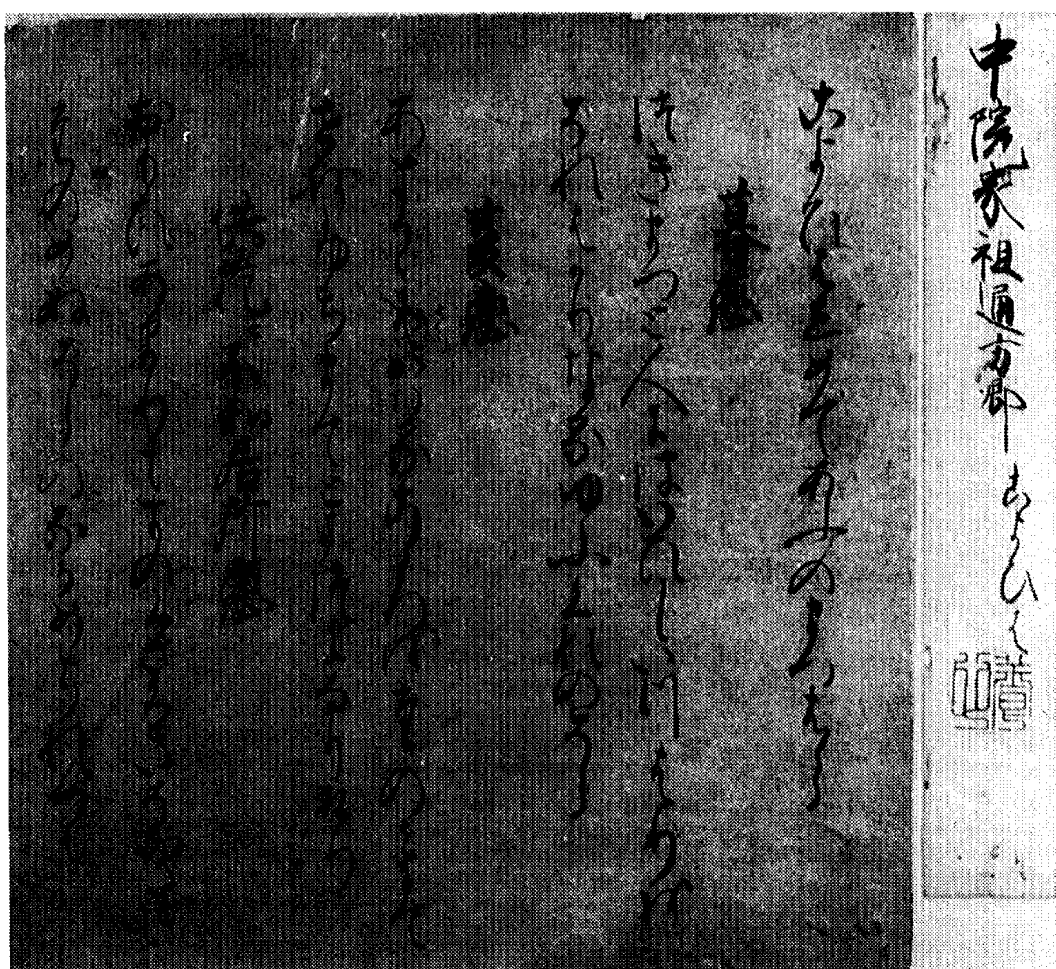
あきのいろもしたてるはかりなりにけり

ゆふひかくれのみねのみちち

【補考】本切は、『古筆名葉集』⁽¹⁹⁾に「巻物切 百首自

詠哥二行書有名詠草ノ切也此外類筆ナシ元禄年中初テ

四、伝中院通方筆六半切



出ル」とあり、『増補新撰古筆名葉集』に「御文庫切
自詠百首有名詠草ナリ哥二行書定家卿加筆点アル処
モアリ」と見える名物切。「御文庫切」については、
既に久保木哲夫氏の詳細な御論考⁽²⁰⁾があり、現存八葉
(内二葉は、『予楽院模写手鑑』の近衛家熙による模
写)が集成されている。

久保木氏が指摘されたように、「御文庫切」は家良
の家集『後鳥羽院・定家・知家人道撰歌』の断簡であ
ると考えられるが、本切に載せる一首は、現存する同
集には撰入されておらず、また、他の諸資料にも見え
ない新出歌である。『藻塩草』五〇の第一首「みむろ
山したをくつゆの草葉までかけてうつろふ秋はきにけ
り」もまた、本切の一首と同様、同集に撰入されてい
ない詠作であり、同歌には合点及び「似思仍止」なる
肩注が付されている。この合点及び肩注が『増補新撰
古筆名葉集』の「定家卿加筆点アル処モアリ」という
記述に当たるものであろうが、久保木氏は、この合点
を「一種の除去記号」と推定されている。本切には、

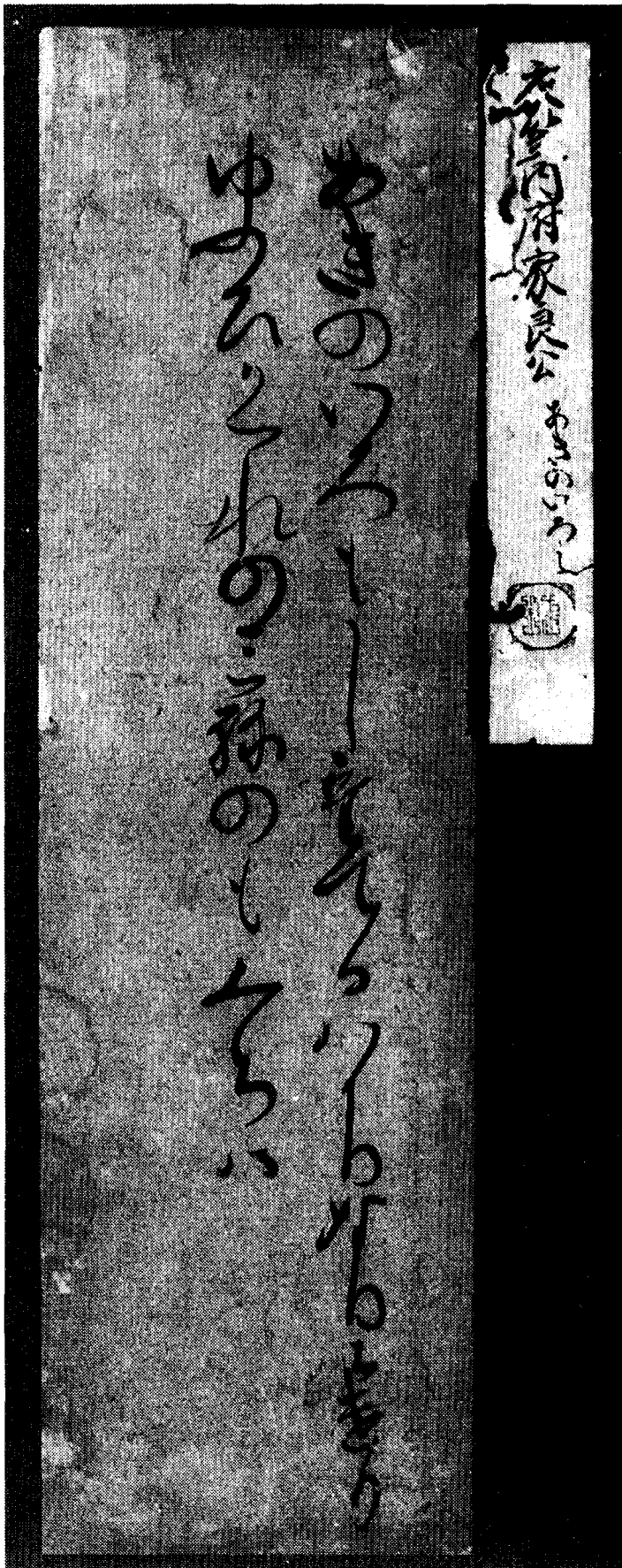
同様の合点及び肩注は認められないが、上句右肩部分
が(白黒写真では不鮮明であるが)明らかに削り取ら
れており、ここに合点或いは小字書入が存した可能性
が存在する(但し、『藻塩草』所収切に比して、その
削り取られたと思われる部分は小さく、同切と同じ大
ささの合点・肩注等が付されていたとは考えにくい)。
本切の一首が現存家集に撰歌されていない点からも、
ここに何らかの「除去記号」が存していたことは、当
然予想されることである。また、本切は、歌の左側部
分がかなり大きな空白となっているが、本詠の詠歌内
容は、秋歌の末尾歌としてもおかしくないものである
ので、或いは、各部立毎にこのような空白を取ってい
たものかも知れない。

他の御文庫切の寸法は、『藻塩草』所収切29・4×
10・2、『文彩帖』所収切29・3×5・2、『見ぬ世の
友』所収切29・6×7・2、『大手鑑』所収切29・9
×5・0、『翰墨城』所収切29・7×14・4であり(根
津美術館所蔵切は不明)、本切もほぼ同様である。料

紙については、これを「斐の素紙」とするものと、
「楮の素紙」とするものに分かれるが、内閣文庫蔵
『古筆家秘書』⁽²¹⁾に「杉原 一尺余 哥一首二行書（百
首自詠哥）」とあるように、横に漉き目のある楮の素
紙と見て良いように思われる。⁽²²⁾「御文庫切」が、伝え

られるように家良の自筆であるとすれば、『予楽院模
写手鑑』二〇九に見える奥書（「延應元七月京極中納
言／被請愚草十二月廿四日被返／送之次相具之」）か
ら、家良四八歳の筆跡ということになる。

五、衣笠内大臣家良筆御文庫切



六 伝藤原為家筆姫路切

【極札】表「為家卿」ゆくゑなき、裏「朱割印 汲水」哥一首^{辛酉}

正九印恵（14・4×2・2）。享和元（一八〇一）年正月、大倉汲水（了恵）極。切裏左上に「二四」と打付け書有り。

【料紙】斐紙、金銀箔散らし（17・0×13・1）。

【出典】『物語二百番歌合』三十五番左・柏木権大納言・六九。

【書写年代】鎌倉中期。

【伝承筆者】為家（御子左、定家男）、建久九（一一九八）年—建治元（一二七五）年五月一日、七八歳。

【翻刻】

柏木権大納言

ゆくゑなきそらのけふりとなりぬとも

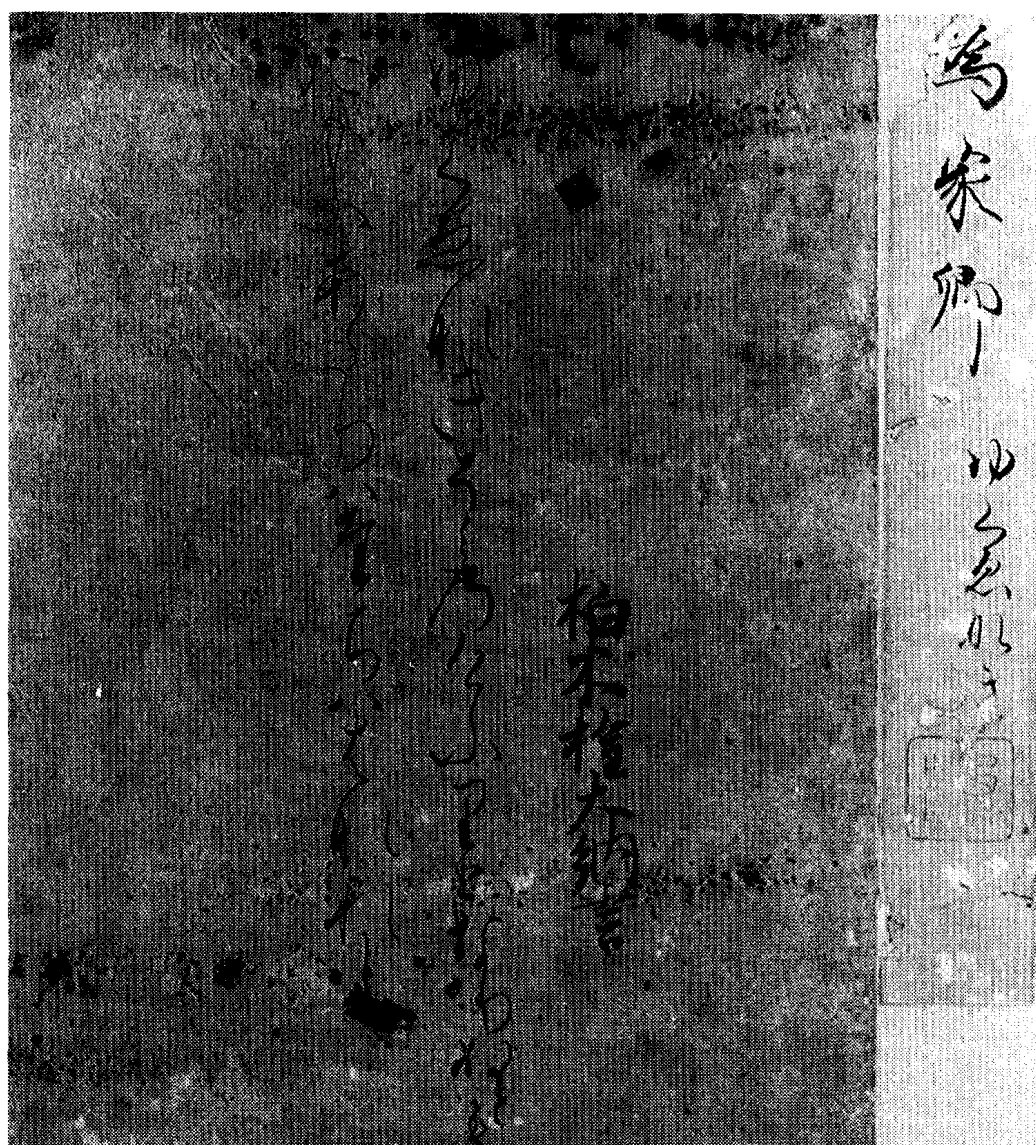
おもふあたりはたちははなれし

【補考】本切は、『古筆名葉集』「為家」項に「姫路切小四半金ギン切箔アリ哥二行書」と見え、『増補新

撰古筆名葉集』にも「姫路切 小四半源氏狭衣哥合ウタ二行書金銀切箔アリ」とある名物切。伝存はかなり多く、その巻頭部分及び一番左が『見ぬ世の友』に押されている他、現在二五葉が確認されるようである。⁽²³⁾

本切は、「三十五番／左 女三宮に」の部分削り取られており、一見すると歌合切とは見えない体裁に改められている。『古筆名葉集』は、文化五（一八〇八）年以前の刊行であるが、それに時期を接する極めであるにも関わらず、極札裏には「哥一首」とある。大倉汲水がこの切を極めた享和元（一八〇一）年頃には、未だ「姫路切」なる名称が用いられておらず、名物切として扱われていなかったものであろうか（天明八（一七八八）年頃第一次成立かとされる内閣文庫蔵『古筆家秘書』や享保五（一七二〇）年以前成立の静嘉堂文庫蔵『古筆切目安』には、「姫路切」に該当する切は掲出されていない⁽²⁴⁾）。他にも、このような直しのある切が散見するようであり、それらの切と極札の記載年次や切の呼称との関係が注目される。

六、伝藤原為家筆姫路切



七 伝藤原為家筆新古今集切

【極札】表「冷泉為家」、極印・裏書なし（8・7×2・0）。

【料紙】斐紙（16・5×11・2）。

【出典】『新古今和歌集』卷十九・神祇・一九一二―一九一三上句。

【書写年代】鎌倉初―中期。

【伝承筆者】↓六参照。

【翻刻】

のまらうとの宮にてよみ侍ける

左京大夫顕輔

としふともこしのしらやまわすれ

すはかしらのゆきをあはれともみよ

一品聡子内親王すみよしにまう

て、人、哥よみ侍けるによめる

藤原道経

すみよしのはま、つかえに風ふけは

【補考】本切は、「冷泉為家」なる伝承筆者名を記した付札を有するが、現存する伝為家筆新古今集切十三種（『古筆学大成』第十巻図275―292に掲出）の内に、同筆と認められるものは見出せないようである。原態は、小四半の小型冊子本であったか、或いは、升型本であったものが、後ろ二行程度切り取られているのかのいずれかであろう。書写年代は、上句下句で厳密に改行していない書写態度からすれば、鎌倉初期の書写であるのかも知れない（「原」の「」が下に伸び流れている筆致などからも、そのことが窺われる）。いずれにしても、為家筆と伝承されるほどの切ではないと思われ、その付札自体の新しさから言って、この伝承筆者名そのものも余り信用が置けないものである。或いは、他の伝承筆者名を付した類切が存する可能性もあるが、現在のところ管見に触れない。

七、伝藤原為家筆新古今集切

冷泉為家



八 伝阿仏尼筆角倉切

【極札】表「阿佛はるくと」〔琴山〕、裏「切」〔辛卯極宋割印〕

【了音】〔角印〕 (14・3×2・2)。正徳元(一七二三)年、古

筆了音極。

【料紙】斐紙、藍内曇り(23・0×15・0)。

【出典】『後撰和歌集』卷十五・雑一・一〇七九歌本文一〇八〇詞書。

【書写年代】鎌倉中期。

【伝承筆者】阿仏(平度繁養女、安嘉門院右兵衛佐、安嘉門院四条とも)、生年未詳—弘安六(一二八三年、六〇余歳)。

【翻刻】

はるくとかすはわすれすありなから

はなさかぬきをなに、うゑけん

殿上まかりをり侍けるひかねすけ朝臣
のもとにつかはしける

平中興

よと、もにみねへふもとへおりのほり

ゆく、もの身はわれにそありける

またきさきになりたまはさりける

ときかたはらの女御などのねたみけ

るけしきありけるころみかと

【補考】本切は、『新撰増補古筆名葉集』『阿仏尼』項に「角倉切 四半後撰哥二行雲紙又ハ白紙」とある名物切。記載通り、藍内曇りと白紙の二種の料紙があり、『古筆学大成』第七卷には、二三葉(図52~74)が掲出されている。「角倉切」は、横に用いられた雲紙の淡く柔らかな青の色合に、その流麗な筆致が溶け合い、鎌倉期の古筆としては観賞価値の高いものである。

「角倉切」の本文系統は、小松茂美氏に依ると、

『定家本』はむろんのこと、別本系統の伝本(二荒山神社宝蔵本・堀河本)などともかなりの異同のある

「従来に知られていない異本」であるという。試みに、

天福本・中院本・貞応二年本・堀河本⁽²⁵⁾・承保三年奥書⁽²⁶⁾本・承安三年奥書本⁽²⁷⁾に限って、本切との異同を注記し

ておく(以下、天・中・貞・堀・保・安と略記)。

○はるくとはるくの(天・中・貞・堀・保・安) ○わすれす―朱校異アリ(安〔影印不鮮明ノ

為読解デキズ〕) ○殿上―外吏にしはくまかり

ありきて殿上(天・中・貞・堀イ・安)・しはく

まかりありきて殿上(堀・保) ○まかりをり侍け

るひ―まかりおりて侍ける時(保)・まかりおりて

ありける時(安)・おりて侍ける時(天・中・貞・

堀) ○かねすけ―かねすけの(天・中・安〔但シ、

「の」ニ朱校異アルモ読メズ) ○朝臣のもとに

―朝臣に(保) ○つかはしける―をくり侍ける

(天・中・貞・堀イ・保・安)・をくりける(堀)

○平中興―平なかき(中・貞・堀イ・安〔但シ

「なかき」ニ朱校異アルモ読メズ) ○身は―み

そ(堀) ○われにそありける―我身なりける(堀)・

我身なりけり(保) ○女御などの―女御など(堀・

保・安)・女御たち(天・中・貞) ○ねたみける

―そねみたる(堀・保)・そねみたまふ(天・中・

八、伝阿仏尼筆角倉切

何

108

ちるく　とわ　わ　れ　は　あ　る　う
 の　れ　う　れ　う　う　う　う　う
 殿上　う　う　う　う　う　う　う
 乃　う　う　う　う　う　う　う

平中興

ともどもわくわくしたの
 ちからがわくわくする
 ところがある

貞・安) ○ありけるころ―なりける時(天・中・貞・安)

以上の校異からも、本切の本文系統は、定家本系(天・中・貞)とは全く相違し、古本系(堀・保)・汎清輔本系(安)とも一致せず、全く独自の系統に立つものであることが認められる。

尚、同じく青雲紙を横に用いた伝阿仏尼筆の拾遺集切(白鶴美術館蔵『手鑑』所収「角倉切」、個人蔵『古筆学大成』第八巻図45掲出)、出光美術館蔵手鑑『聯珠筆林』⁽²⁸⁾所収の三葉が知られる)も存在し、同様の雲紙を用いた古今集の断簡である伝為家筆角倉切(角倉家に伝来、昭和二(一九二七)年に分割)とともに、或いは、元は三代集として角倉家に伝来していたものであろうか。

九 伝冷泉為相筆相模切

【極札】表「為相卿^{ちかひてのちに}」、裏書なし(10・

9×1・7)。切裏、左上に「為相卿」、左下に「五十」と打付け書。

【料紙】斐紙(21・5×15・0)。

【出典】『拾遺和歌集』卷十四・恋四・八七一―八七三上句。

【書写年代】鎌倉中―後期。

【伝承筆者】為相(御子左・冷泉、為家男)、弘長三(一二六三)年―嘉暦三(一二三二)年七月一七日、六六歳。

【翻刻】

ちかひてのちにつかはしける

實方朝臣

なにせんにいのちをかけてちかひけん

いかはやとおもふおりもありけり

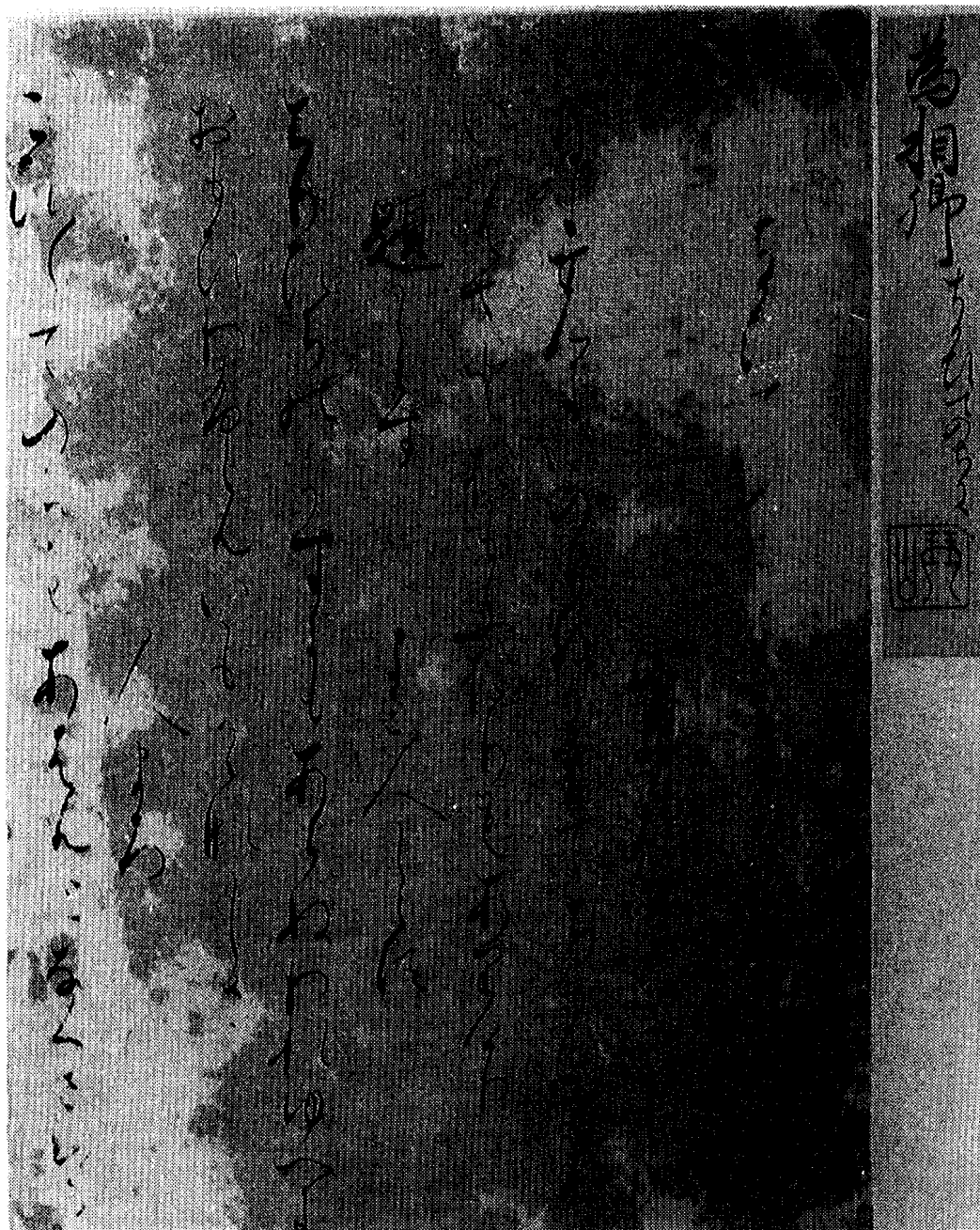
題しらす よみ人しらす

ちりひちのかすにもあらぬわれゆへに

おもひわふらんいか、なしさ

人まろ

九、伝藤原為相筆相模切



こひく／＼のちもあはんとなくさむる

【補考】本切は、『増補新撰古筆名葉集』「為相」項の筆頭に「相模切 四半拾遺哥二行書金銀緑青草小鳥ノ下絵アリ」とある「相模切」に該当するものと思われる。「相模切」は、『古筆学大成』第八卷に「伝冷泉為相筆相模切本拾遺和歌集」として二葉(図117・118)掲出されているが、その内、京都国立博物館蔵『藻塩草』一〇九は「銀泥藍丁子等の下絵のある斐紙⁽²⁹⁾」であり、先の記載に該当するが、個人蔵手鑑『鴈叢』四三の切は、本切と同様、斐の素紙である(恐らく、「もとは、紙を横位置に使用した卷子本のために調じられた料紙であつた」⁽³⁰⁾ものを、冊子本に調じ直した後に両面書写したため、裏側は素紙となったものであろう)。本切は、上記二葉と同筆と認められるが、本切を除く二葉には、集付が認められる。しかし、本切は上下をかなり切り取られており(『藻塩草』一〇九は23・8×14・2、『鴈叢』四三は23・8×14・4)『古筆学大成』影印実測)、仮に集付が存した(八七一は拾遺抄所収歌)

としても、その部分は切り取られたものと考えられる。本文系統は定家本系統に全く一致し(異本第一系統・第二系統とは異同あり⁽³¹⁾)、定家本系と認められる。

十 伝三浦道寸筆続古今集切

【極札】二枚。表「三浦道寸^{かつみても}」^{朱割印}、裏「切^{庚寅}」

九^{朱割印}「^{横四印}丁音」(14・3×2・2)↓宝永七(一七一〇)年九月、古筆了音極。表「三浦道寸^{かつみても}」^{横四印}、裏書なし(14・5×2・2)↓大倉汲水極。切裏に「三浦道寸^{極候類}」^{札請合}と打付け書、左下隅に小花押有り。

【料紙】斐楮漉混ぜ紙(25・1×12・1)。

【出典】『続古今和歌集』卷二・春下・一〇八―一一〇。

【書写年代】室町後期。

【伝承筆者】義同(佐原氏、上杉高政男、三浦時高猶子、永正元(一五〇四)年出家、法名道寸)、生年未詳―永正一三(一五一六)年七月戦没。

十、伝三浦道寸筆続古今集切

三浦道寸

かほくも



三浦道寸

かほくも



建永六年三月三日

傳道寸家

かほくもかほくもかほくもかほくもかほくも

かほくも

右近中将権平

かほくもかほくもかほくもかほくもかほくも

建永二年正月一日

大宰権帥権平

かほくもかほくもかほくもかほくもかほくも

【翻刻】

建長六年三月三首哥合に

侍従行家

かつみてもあかぬ心の色ならはうつるはかりや花
にそめまし

花の哥の中に

右近中将經平

暮やすき春の日かけと思ふこそ花みてあかぬこ、
ろ成けれ

寶治二年百首哥に見花といふ心を

太宰権帥為經

見てもなをしつのをたまきなかき日のくる、もあ
かぬ山桜かな

【補考】伝三浦義同筆の続古今集切は、現在、管見では、徳川黎明会所蔵『集古帖』⁽³²⁾一三九「伝三浦介平義同筆続古今集切」(巻九・離別・八三八―八四一↓十行・歌一行書)、京都国立博物館蔵『翰墨場』⁽³³⁾一〇七「伝平義同筆続古今集切」(巻九・離別断簡↓未見)、『古今墨林』一六三「伝三浦道寸筆続古今集切」(巻

十・羈旅・九三五―九三九詞書↓十行・歌一行書)の三葉が確認される。寸法は、『集古帖』所収切が23・4×16・0、『翰墨場』所収切が25・3×15・9である(『古今墨林』所収切は不明)。本切は一面八行であり、前後二行分が切り取られているものと考えられる。この内、『集古帖』一三九に存する異本注記(八三九第三句「たのめとも」の「と」〔実際には「め」の部分の横〕に「てイ」と傍書)及び異同(八四一作者表記「前中納言長雅」↓他本「権中納言長雅」)に一致する伝本は、管見では、谷山茂博士旧蔵本のみである。稿者の調査では、この谷山本は、同じく義同の書写を経ていると考えられる『温故抄』に使用された行家本系統の伝本の姿を伝えているものと考えられる。⁽³⁴⁾これらを勘案すると、この伝三浦義同筆続古今集切の原本(或いは、その校合本)は、『温故抄』と同様に関東に流传した行家所持本(六条藤家Ⅱ九条家本)中の一本であったのではないかと想像される。

おわりに

古筆切資料の研究は、勿論、その書写内容を中心に
なされるものである。しかし、古筆切は、元来、冊子
本或いは卷子本として存在したものを、そこから切断
し、売買の対象として取り扱ったものである。従って、
切断Ⅱ鑑定者の存在は、古筆切研究の前提として、当
然意識されるものであるにも関わらず、従来の研究で
は、極札が手鑑の台紙に直接貼付されてあったりした
ため、裏書等の調査がなし得ず、あまり積極的に言及
されることはなかったようである⁽³⁵⁾（このことは、例え
ば、上下冊別筆の同一料紙の冊子本から切断された切
の同定、というような場合に、極札に依って知られる
鑑定者や鑑定時期の一致が、或る程度有効な傍証を提
供する、というようなことが、方法的にも全く顧慮さ
れなかった、というようなことにも顕れている⁽³⁶⁾。本
稿では、この点を意識して、極札についてかなりのス
ペースを割いた。手鑑に直接貼付された極札について

は、今後とも調査が進展することはあまり期待できな
いが、少なくとも個人蔵の古筆切資料については、で
きる限りこの点を考慮して、書誌に組み入れて行く必
要があると思われる。

以上、本稿では、僅か十葉の古筆切を紹介し得たに
過ぎない。また、拙い紹介に終始したが、幾許かでも
和歌研究に資するところがあれば幸いである。

〔注〕

- 1、『古筆手鑑大成』編集委員会編（角川書店、昭和
五八年十一月刊行中）。
- 2、小松茂美氏著（講談社、昭和六四年一月第一期十
卷刊行）。
- 3、藤井隆・田中登氏著『国文学古筆切入門』（和泉
書院、昭和六〇年二月）、同『国文学古筆切入門』
（和泉書院、平成元年四月）、同『続々国文学古筆切
入門』（和泉書院、平成四年五月）。
- 4、前掲『続々国文学古筆切入門』所収「古筆切総説

(続々) 二、国文学古筆切の今後と現状」。

5、【極札】【料紙】項の算用数字は、寸法を示す。

【極札】項の極印は□で囲んで示し、朱印のみその旨を注記した(割印の位置は、正確には概ね干支の横に押されているが、便宜上、その前後に位置させた)。また、切裏の打付け書も、【極札】項に含めた。【出典】【補考】項の歌番号は、『新編国歌大観』に依った。尚、【字高】【行数】等の項目も設けるべきであろうが、今回は全切の影印を添付したこともあり、省略した。

6、伊井春樹・高田信敬氏編『古筆切提要』(淡文社、昭和五九年一月) 所収の安政五年版影印及び伊井春樹氏・大阪大学古代中世文学研究会編『新版古筆名葉集』(古代中世文学資料研究叢書2、和泉書院、昭和六三年一〇月) 所収の安政五年版翻刻に依る。

7、昭和三七年八月初版。同朋舎、昭和五四年八月復刊に依る。

8、萩谷朴氏編著『平安朝歌合大成』第十卷「史論総

説書志篇」(昭和四四年二月初版。同朋舎、昭和五四年八月復刊に依る) 第五章「平安朝歌合の書志」第三節「平安朝における歌合文献集成事業(二)――類聚歌合」参照。

9、徳川黎明會叢書・古筆手鑑篇三『藁叢・桃江・文車』(思文閣出版、昭和六一年八月) に依る。

10、小松茂美氏著(講談社、昭和四五年一二月)。

11、博文堂、大正一四年五月。

12、小松茂美氏著(講談社、昭和四七年八月)。

13、『書道藝術』第一六卷「西行 藤原俊成 藤原定家」(中央公論社、昭和四七年六月) 所収。

14、伊井春樹氏編『古筆切資料集成』卷三「私家集・詠草」(思文閣出版、平成元年一二月) 及び巻五「私撰集・歌合・朗詠集」(思文閣出版、平成三年一二月) に依る。

15、『古筆大辞典』(淡文社刊、昭和五四年一二月) 「藤原俊成詠草切」項。

16、「仮名古筆(一四) 俊成書跡」(『汲古』第二三号、

平成四年十一月) 参照。

- 17、「後白河院法住寺御所御供花会和歌」については、日本古典文学大系80『平安鎌倉私家集』(岩波書店、昭和三十九年九月)「長秋詠藻」(久松潜一氏校注)二三一補注所引の久保田淳氏説及び松野陽一氏著『藤原俊成の研究』(笠間書院、昭和四十八年三月初版〔昭和五三年九月再版に依る〕)七一〇―七一一頁参照。他に、「供花会」詠としては、『成通集』九二(詞書略)、『寂蓮法師集』一二四「後白河院かくれさせおはしまして三、四年の後、五月御供花の時、六条殿にて池水久澄」、『無名抄』(『日本歌学大系』第三卷所収本文に依る)「寂蓮顕昭両人心事」に「ソノカミ宣陽門院ノ御供花ノ御会ノ御歌ニ、トコナツチギリヒサシトイフ題ニ、ウゴキナキヨノ山トナデシコトヨメリシヲバ、或先達ミテ我歌ニニタリ、ヨミカヘヨトアナガチニ申侍シカバ、チカラナクテ当座ニヨミカヘテキ」とある会などが認められる。
- 18、伊井春樹氏編『古筆切資料集』巻一「勅撰集上」

(思文閣出版、平成元年二月)、同巻二「勅撰集下」(思文閣出版、平成元年五月)及び『古筆学大成』第十巻参照。

19、『新版古筆名葉集』(前掲)所収の文政十一年版・翻刻に依る。

20、「衣笠内大臣家良詠と御文庫切」(『リポート笠間』第32号「古典・その再評価 中世和歌と古筆資料」、平成三年十一月)参照。

21、『新版古筆名葉集』(前掲)所収の翻刻に依る。

22、近時、京都国立博物館・特別展覧会「かなの美」(平成四年一〇月一三日―十一月一五日)に於いて、陽明文庫蔵『大手鑑』所収の「御文庫切」が展覧されていたが、よく見るとやはり横に漉き目があり、但し、それが裏打ち紙のものか、切自体のものかわからない程であったが、架蔵切は、非常に傷みが烈しく、裏打ち紙との間が剝離している部分もあり、その為に漉き目が切自体の紙にあるものであることが知られる。

- 23、『古筆切提要』（前掲）及び伊井春樹氏編『古筆切資料集成』巻四「懷紙・散文・連歌」（思文閣出版、平成二年六月）参照。
- 24、『新版古筆名葉集』（前掲）「解題」参照。
- 25、以上四本は、大阪女子大学国文学研究室編著『後撰和歌集総索引』（大阪女子大学、昭和四〇年十二月）所収の翻刻に依る。
- 26、小松茂美氏著『後撰和歌集 校本と研究』「校本編」（誠信書房、昭和三六年二月）所収の久曾神昇氏蔵本翻刻に依る。
- 27、杉谷寿郎氏著『後撰和歌集諸本の研究』（笠間書院、昭和四六年三月）所収の鳥取県立図書館蔵「二十一代集」本影印の朱校異本文に依る。
- 28、出光美術館所蔵品図録『書』（平凡社、平成四年七月）所収。
- 29、古筆手鑑大成第四巻『藻塩草』京都国立博物館蔵（角川書店、昭和六〇年一月）の同切解説。
- 30、『古筆学大成』第八巻「解説」参照。
- 31、片桐洋一氏著『拾遺和歌集の研究 校本篇伝本研究篇』（大学堂書店、昭和四五年十二月）参照。
- 32、徳川黎明會叢書・古筆手鑑篇四『鳳凰台・水荃・集古帖』（思文閣出版、平成元年三月）に依る。
- 33、『京都国立博物館蔵品図版目録 書跡編 日本』（京都国立博物館、昭和五八年三月）「参考資料」に依る。
- 34、稿者口頭発表「内閣文庫蔵『温故抄』について―撰者と撰集企図を中心に―」（中京大学国文学会秋季大会、平成四年十一月一日）の発表資料参照。
- 35、この点について、最も配慮されたものとしては、慶應義塾大学付属研究所 斯道文庫講座編『慶應義塾図書館蔵小津家古筆切聚影』（汲古書院、平成元年七月）がある。
- 尚、極札については、小松茂美氏著『古筆』（前掲）「七 古筆家とその周辺」に詳しく、『古筆学大成』にも、断片的に極札に関する言及がなされている。
- 36、古写本等では、複数の筆者が分担して一つの作品なり書物なりを書写することは、比較的良好に行われ

ることであり、同一冊子内での筆者の交代も、間々見られることであるにも関わらず、古筆切に関しては、筆跡絶対主義を採っておられるせいかな、こうした見方そのものが否定的に扱われる傾向が存するようである。

〈付記〉

本稿の作成に当たっては、後藤重郎先生に御指導をいただき、中村文・藤原彰子（大阪府立泉大津高等学校教諭）・横山理・横山あいの各氏に、貴重な御教示・御協力をいただいた。また、中京大学図書館の平田伸夫先生には、貴重な発表の場を与えていただいた。ともに、ここに記して深謝致します。